

誌上 舞台 文楽

古くからある太夫と三味線による語り物「浄瑠璃」に、3人遣いの緑り人形が合体した芝居で、江戸時代の大坂で誕生。人形浄瑠璃とも呼ばれる。ユネスコ世界無形遺産。太夫と三味線で上演する形式は素浄瑠璃という。

文楽三味線弾き



鶴澤清二郎(つるさわせいじろう)

昭和51年十代竹澤弥七に入門、研究生となり祖父(鶴澤藤蔵)の前名鶴澤清二郎を名のる。昭和53年鶴澤清治(人間国宝)門下となる。昭和58年朝日座で初舞台。平成8年から竹本綱大夫(人間国宝)の相三味線を務める。大阪文化祭賞奨励賞、咲くやこの花賞国立劇場文楽賞文楽優秀賞等、受賞多数。

昭和59年に文楽劇場ができるまで、文楽は道頓堀の朝日座で上演されてきました。小さい頃、父(竹本綱大夫)の舞台を見に行った帰り、ミナミのお寿司屋さんに連れて行ってもらえるのがうれしくてね。「文楽はええな」と幼心に刷り込まれていきました(笑)。

父からは面と向かって「文楽をやれ」とは言われませんでしたがお寿司の効果と(笑)、曾祖父・竹本源大夫、祖父・鶴澤藤蔵、父と三代続いた文楽の家に生まれ育った環境なのでしょう、小学校低学年の時には自分から頼んで地唄の三味線(細棹)を習わせてもらうようになりました。

文楽で使う太棹を始めたのは中学三年生から。胴も棹も細棹よりずっと大きく、糸も非常に強いので、最初は撥がはじき返されてうまく音が鳴りませんでした。それで糸に手ぬぐいを巻いて負荷を掛け、手首のスナップを利かせる猛特訓をしました。三味線弾きの腕が太いのは、皆こういう稽古を積んでいるからなのです。

細棹ではなく太棹をなぜ使うのかというと、音域がとても広いからです。細棹や中棹ではつかえてしまう乙(低音)の響きも太棹なら出せるのです。

余談ですが「ジャラーン」という残響は、琵琶の音に似ていると思いませんか。実は浄瑠璃の起源は、平曲を語る琵琶法師にあるとされています。舞台で太夫は見台の上に床本(台本)を置いているのに、三味線弾きには楽譜がないでしょう? それは盲人である琵琶法師に由来してのことです。

二つの音に万感の思いをこめて

このように文楽は唄ではなく「語り物」であり、三味線も伴奏ではありません。太夫の語りを助けて、老若男女、状況、複雑な感情を音で表現していく、芝居の演出の一つになっているのです。二つの音にも、何がしかの意味が込められていますので、それを感じとっていたら、と思います。



以前、父との稽古中、「そのチーンという音では出られへん」と言い放たれたことがあります。説明は一切なし。自分で考えよというのです。たった一撥のチーンなのに、どう弾いてもOKが出ず、毎回その下りが近づくにつれ緊張でカチカチになった覚えがあります。

新春公演の『傾城恋飛脚』では、遊女梅川を身請けするために公金横領の罪を犯した忠兵衛の身を案じて、父の孫右衛門が「憎いやつじゃと思へ

ども：かわゆうござる」と、苦しい胸の内を吐露する「新口村の段」をやらせていただきます。鳥の中でも情が深いという善知鳥の子別れになぞらえて、親子の永久の別離を語る終盤、三味線の音が瞬大くなる部分がありますが、これは親鳥が羽を広げて、巣に戻ろうとする我が子を追い払う様子を表しているといえます。

いかにして奥深い文楽の世界を伝えるか。上手に弾くことよりも、いえ、時には自分の芸を殺してでも、情を感じさせる三味線弾きになりたいと思っています。父の相三味線を務めて早十四年。大曲を思うように弾きこなせず落ち込んだ時期もありましたが、今も三味線弾きを続けていられるのは、師匠の鶴澤清治師をはじめ、みなさまの励ましがあつたおかげ。来春、父の竹本源大夫襲名に合わせて、私も鶴澤藤蔵を襲名させていただきます。いただけるのは望外の喜びです。



竹本綱大夫(左)、鶴澤清二郎(右)

初春公演

平成23年1月3日(月)～23日(日)
第1部11:00～「寿式三番叟」「傾城反魂香」
「染模様妹背門松」
第2部16:00～「駒山姫捨松」「傾城恋飛脚」「小鍛冶」
※14日より1部と2部の演目を入替
1等5,800円、2等2,300円
国立文楽劇場
地下鉄・近鉄「日本橋」下車
Tel.06-6212-2531 <http://www.ntj.jac.go.jp/>

竹本源大夫 鶴澤藤蔵 襲名公演

平成23年4月2日(土)～24日(日)5,800円
国立文楽劇場
平成23年5月7日(土)～23日(月)6,500円
国立劇場小劇場(東京)
清藤会 Tel&Fax.06-6654-0275